

知る喜び, 知ってもらおう喜び, そしてそれらが連鎖するよろこび

第3期OB 森岡 耕作

「自然数 n が $n > 2$ のとき, $X^n + Y^n = Z^n$ を満たす自然数 X, Y, Z は存在しない」

何でもないようなこの命題。「フェルマーの最終定理」。これが提起されてから約 350 年もの間, 何人もその証明をなしえなかったらしい。そして, それが証明されるまでには, 多くの人生が積み重ねられてきたようである。サイモン・シンの著書『フェルマーの最終定理——ピュタゴラスに始まり, ワイルズが証明するまで——』を読み, この何気ない命題の証明に人生を賭してきた人たちの物語に感動し, 共感した。彼や彼女は, 知ることに魅せられて, その短い人生を賭ける。わかったときに感じるであろう喜びを夢見ながら, 目の前にある, 何でもない問題に取り組む。

知ることに対して, いや, 他の人には何気ないことを知ることに対してさえ, 古今東西, 人は本気で喜びを感じられるようである。そして今, 自らもそのような流れの中に身を任せようとしている。無論, 数学の世界に飛び込もうとしているわけではない。マーケティングという学問領域において, 知ることの喜びに身を任せている多くの研究者と同じくすることによってしようとしている。本の中を歩いていても, 街中を歩いていても, 自らの問題意識



チキチキ 第1回ガチンコ釣り対決@江ノ島 (著者は中央)

に関連することを目にする事ができる。それも, 毎日。そうすると, その問題に取り組まざるをえない。そして, その一端についてでもわかることがあると, 悦に入ったようにニヤついて文章を書き出す。そんな毎日が苦痛でもないし, むしろ, 好きでさえあると思える。もはや, 知ることの喜びにとりつかれていると言えよう。

知ることの喜び。それが研究者の駆動力のすべてであるかのように思うこともある。しかし, 幸運にも今年度のはじめ, それを一変させるような機会を得ることができた。ある大学で教鞭をとることを紹介, 推薦していただいたことである。このことは, 単に就職へのステップ以上のものを自分にもたらしけている。最初は, 「若い先生で楽しそうだから」, そう思って出席していたかもしれない学生たちが, 次第に私の話真剣に耳を傾けてくれるようになり, 今では自らの意見を述べようとさえする学生もでてきた。教室の左後ろにいつも座っているある学生は, こう言う。「なんとなく生活していた自分のまわりにも, 授

業で習った規則がいろいろあって楽しいです。それをわかったときに自分の見方が変わっていることに気がつきました」と。私にとって、このことは自分にとって重要な問題を解いているわけでもなければ、そこに知ることに喜びを感じているわけでもない。にもかかわらず、そうしてくれる学生がいることに對して素直に嬉しく思う。自分がいつしか覚えた喜びに似たものを、彼らもまた感じ始めている。今や、私はこのことにも喜びを覚え始めている。



接待とも知らずパターゴルフの優勝を喜ぶ著者

知る喜びと知ってもらふ喜び。今、それらが私の中で連鎖しはじめようとしている。静かな水面に、ひとつの水滴が落ち、その波紋が広がるかのように。そして、その連鎖は新たな価値を生成するであろう。思い返すと小野ゼミは、2つの喜び/喜びが連鎖した結果として生成する「よろこび」を駆動力として動いているのかもしれない。そう思うとき、その「よろこび」をより強く感じてみたという新たな価値が私の中に確かに芽生え始めている。

追記) フェルマーの最終定理を証明したアンドリュー・ワイルズは、研究者としてはもちろん、教育者としてもまた、優秀な研究者を輩出するような一流の人物であるようである。おそらく彼も、知る喜びと知ってもらふ喜びとの連鎖、そしてそれによって生まれる「よろこび」を感じていることであろう。他方、彼は、その「よろこび」を生成するシステムを支える別なシステムを構築し、その別なシステムの重要性を認識していたようである。先輩、同輩、そして後輩までも、結婚していく中で、その別なシステムとそれが生み出す価値に対してもまた、強い興味を抱いている今日この頃…。



先生ご家族（史晃&史泰）と江島神社初詣